

平成元年法律第九十一号

民事保全法

目次

- 第一章 総則(第一条―第八条)
- 第二章 保全命令に関する手続
  - 第一節 総則(第九条・第十条)
  - 第二節 保全命令

- 第一款 通則(第十一条―第十九条)
- 第二款 仮差押命令(第二十条―第二十二 条)
- 第三款 仮処分命令(第二十三条―第二十 五条(二))

- 第三節 保全異議(第二十六条―第三十六 条)
- 第四節 保全取消し(第三十七条―第四十 条)
- 第五節 保全抗告(第四十一条・第四十二 条)

- 第三章 保全執行に関する手続
  - 第一節 総則(第四十三条―第四十六条)
  - 第二節 仮差押えの執行(第四十七条―第五 十一条)
  - 第三節 仮処分の執行(第五十二条―第五十 七条)

- 第四章 仮処分の効力(第五十八条―第六十五 条)
- 第五章 罰則(第六十六条・第六十七条)

- 附則
- 第一章 総則
- (趣旨)

第一条 民事訴訟の本案の権利の実現を保全する ための仮差押え及び係争物に関する仮処分並び に民事訴訟の本案の権利関係につき仮の地位を 定めるための仮処分(以下「民事保全」と総称 する。)については、他の法令に定めるもの のほか、この法律の定めるところによる。

第二条 民事保全の機関及び保全執行裁判所( 以下「保全執行」といふ。)は、申立てにより、裁判所が行う。

2 民事保全の執行(以下「保全執行」といふ。) は、申立てにより、裁判所又は執行官が行う。

3 裁判所が行う保全執行に関してはこの法律の 規定により執行処分を行うべき裁判所をもつ て、執行官が行う保全執行の執行処分に関し てはその執行官の所属する地方裁判所をもって保 全執行裁判所とする。

第三条 民事保全の手続に関する裁判は、口頭弁 論を経ないですることができる。

(担保の提供)

第四条 この法律の規定により担保を立てるに は、担保を立てるべきことを命じた裁判所又は 保全執行裁判所の所在地を管轄する地方裁判所 の管轄区域内の供託所に金銭又は担保を立てる べきことを命じた裁判所が相当と認める有価証 券(社債、株式等の振替に関する法律(平成十 三年法律第七十五号)第二百七十八条第一項に 規定する振替債を含む。)を供託する方法その 他最高裁判所規則で定める方法によらなければ ならない。ただし、当事者が特別の契約をした ときは、その契約による。

2 民事訴訟法(平成八年法律第九号)第七十 七条、第七十九条及び第八十条の規定は、前項 の担保について準用する。

(事件の記録の閲覧等)

第五条 保全命令に関する手続又は保全執行に関 する裁判所が行う手続について、利害関係を有す る者は、裁判所書記官に対し、事件の記録の閲 覧若しくは謄写、その正本、謄本若しくは抄本 の交付又は事件に関する事項の証明書の交付を 請求することができる。ただし、債権者以外の 者にあつては、保全命令の申立てに期し口頭弁 論若しくは債務者と呼び出す審尋の期日の指定 があり、又は債務者に対する保全命令の送達が あるまでの間は、この限りでない。

(専属管轄)

第六条 この法律に規定する裁判所の管轄は、専 属とする。

(民事訴訟法の準用)

第七条 特別の定めがある場合を除き、民事保全 の手続に関しては、その性質に反しない限り、 民事訴訟法第一編から第四編までの規定(同法 第八十七条の二の規定を除く。)を準用する。

第八条 この法律に定めるもののほか、民事保全 の手続に必要な事項は、最高裁判所規則で 定める。

第二章 保全命令に関する手続

第一節 総則

第九条 裁判所は、争いに係る事実関係に関し、 当事者の主張を明瞭にさせる必要があるときは は、口頭弁論又は審尋の期日において、当事者 のため事務を処理し、又は補助する者で、裁判 所が相当と認めるものに陳述をさせることができ る。

第十条 削除

第二節 保全命令

第一款 通則

(保全命令事件の管轄)

第十一条 保全命令の申立ては、日本の裁判所に 本案の訴えを提起することができるとき、又は 仮に差し押さえるべき物若しくは係争物が日本 国内にあるときに限り、することができる。

第十二条 保全命令事件は、本案の管轄裁判所又 は仮に差し押さえるべき物若しくは係争物の所 在地を管轄する地方裁判所が管轄する。

2 本案の訴えが民事訴訟法第六条第一項に規定 する特許権等に関する訴えである場合には、保 全命令事件は、前項の規定にかかわらず、本案 の管轄裁判所が管轄する。ただし、仮に差し押 さえるべき物又は係争物の所在地を管轄する地 方裁判所が同条第一項各号に定める裁判所であ るときは、その裁判所もこれを管轄する。

3 本案の管轄裁判所は、第一審裁判所とする。 ただし、本案が控訴審に係属するときは、控訴 裁判所とする。

4 仮に差し押さえるべき物又は係争物が債権 (民事執行法(昭和五十四年法律第四号)第百 四十三条に規定する債権をいう。以下この条に おいて同じ。)であるときは、その債権は、そ の債権の債務者(以下「第三債務者」といふ。) の普通裁判籍の所在地にあるものとする。た だし、船舶(同法百二十二条に規定する船舶をい う。以下同じ。)又は動産(同法百二十二条 に規定する動産をいう。以下同じ。)の引渡し を目的とする債権及び物上の担保権により担保 される債権は、その物の所在地にあるものとす る。

5 前項本文の規定は、仮に差し押さえるべき物 又は係争物が民事執行法第六十七条第一項に 規定する財産権(以下「その他の財産権」とい う。)で第三債務者又はこれに準ずる者がある ものである場合(次項に規定する場合を除く。) について準用する。

6 仮に差し押さえるべき物又は係争物がその他 の財産権で権利の移転について登記又は登録を 要するものであるときは、その財産権は、その 登記又は登録の地にあるものとする。

第十三条 保全命令の申立ては、その趣旨並びに 保全すべき権利又は権利関係及び保全の必要性 を明らかにして、これをしなければならぬ。

2 保全すべき権利又は権利関係及び保全の必要 性は、疎明しなければならない。

(保全命令の担保)

第十四条 保全命令は、担保を立てさせて、若し くは相当と認める一定の期間内に担保を立てる ことを保全執行の実施の条件として、又は担保 を立てさせないで発することができる。

2 前項の担保を立てる場合において、遅滞なく 第四条第一項の供託所に供託することが困難な 事由があるときは、裁判所の許可を得て、債権 者の住所地又は事務所の所在地その他裁判所が 相当と認める地を管轄する地方裁判所の管轄区 域内の供託所に供託することができる。

(裁判長の権限)

第十五条 保全命令は、急迫の事情があるときに 限り、裁判長が発することができる。

(決定の理由)

第十六条 保全命令の申立てについての決定に は、理由を付さなければならない。ただし、口 頭弁論を経ないで決定をする場合には、理由の 要旨を示せば足りる。

(送達)

第十七条 保全命令は、当事者に送達しなければ ならない。

(保全命令の申立ての取下げ)

第十八条 保全命令の申立てを取り下げられるに は、保全異議又は保全取消しの申立てがあつた後 においても、債務者の同意を得ることを要しな い。

(却下の裁判に対する即時抗告)

第十九条 保全命令の申立てを却下する裁判に対 しては、債権者は、告知を受けた日から二週間 の不変期間内に、即時抗告をすることができ る。

2 前項の即時抗告を却下する裁判に対しては、 更に抗告をすることができない。

3 第十六条本文の規定は、第一項の即時抗告に ついての決定について準用する。

第二節 仮差押命令

(仮差押命令の必要性)

第二十条 仮差押命令は、金銭の支払を目的とす る債権について、強制執行をすることができな くなるおそれがあるとき、又は強制執行をする のに著しい困難を生ずるおそれがあるときに発 することができる。

2 仮差押命令は、前項の債権が条件付又は期限付である場合においても、これを発することができ。

(仮差押命令の対象)  
第二十一条 仮差押命令は、特定の物について発しなればならない。ただし、動産の仮差押命令は、目的物を特定しないで発することができる。

(仮差押解放金)  
第二十二條 仮差押命令においては、仮差押えの執行の停止を得るため、又は既にした仮差押えの執行の取消しを得るために債務者が供託すべき金銭の額を定めなければならない。

2 前項の金銭の供託は、仮差押命令を発した裁判所又は保全執行裁判所の所在地を管轄する地方裁判所の管轄区域内の供託所にしなければならない。  
第三款 仮処分命令 (仮処分命令の必要性等)  
第二十三條 係争物に関する仮処分命令は、その現状の変更により、債権者が権利を行使することができなくなるおそれがあるとき、又は権利を行使するのに著しい困難を生ずるおそれがあるときに発することができる。

2 仮の地位を定める仮処分命令は、争いがある権利関係について債権者に生ずる著しい損害又は急迫の危険を避けるためこれを必要とするときに発することができる。  
3 第二十条第二項の規定は、仮処分命令について準用する。  
4 第二項の仮処分命令は、口頭弁論又は債務者が立ち会うことができる審尋の期日を経なければ、これを発することができない。ただし、その期日を経ることができない事情があるときは、この限りでない。

(仮処分の方法)  
第二十四條 裁判所は、仮処分命令の申立ての目的を達するため、債務者に對し一定の行為を命じ、若しくは禁止し、若しくは給付を命じ、又は保管人に目的物を保管させる処分その他の必要な処分をすることができる。  
第二十五條 裁判所は、保全すべき権利が金銭の支払を受けることをもってその行使の目的を達することができるものであるときに限り、債権者の意見を聴いて、仮処分の執行の停止を得る

ため、又は既にした仮処分の執行の取消しを得るために債務者が供託すべき金銭の額を仮処分命令において定めることができる。  
2 第二十二條第二項の規定は、前項の金銭の供託について準用する。  
(債務者を特定しないで発する占有移転禁止の仮処分命令)  
第二十五條之二 占有移転禁止の仮処分命令(係争物の引渡し又は明渡しの請求権を保全するための仮処分命令のうち、次に掲げる事項を内容とするものをいう。以下この条、第五十四條の二及び第六十二條において同じ。)であつて、係争物が不動産であるものについては、その執行前に債務者を特定することを困難とする特別の事情があるときは、裁判所は、債務者を特定しないで、これを発することができる。  
一 債務者に対し、係争物の占有の移転を禁止し、及び係争物の占有を解いて執行官に引き渡すべきことを命ずること。  
二 執行官に、係争物の保管をさせ、かつ、債務者が係争物の占有の移転を禁止されている旨及び執行官が係争物を保管している旨を公示させること。  
2 前項の規定による占有移転禁止の仮処分命令の執行がされたときは、当該執行によつて係争物である不動産の占有を解かれた者が、債務者となる。  
3 第一項の規定による占有移転禁止の仮処分命令は、第四十三條第二項の期間内にその執行がされなかったときは、債務者に対して送達することを要しない。この場合において、第四條第二項において準用する民事訴訟法第七十九條第一項の規定による担保の取消しの決定で第十四條第一項の規定により立てさせた担保に係るものは、裁判所が相当と認める方法で申立人に告知することによつて、その効力を生ずる。

ため、又は既にした仮処分の執行の取消しを得るために債務者が供託すべき金銭の額を仮処分命令において定めることができる。  
2 第二十二條第二項の規定は、前項の金銭の供託について準用する。  
(債務者を特定しないで発する占有移転禁止の仮処分命令)  
第二十五條之二 占有移転禁止の仮処分命令(係争物の引渡し又は明渡しの請求権を保全するための仮処分命令のうち、次に掲げる事項を内容とするものをいう。以下この条、第五十四條の二及び第六十二條において同じ。)であつて、係争物が不動産であるものについては、その執行前に債務者を特定することを困難とする特別の事情があるときは、裁判所は、債務者を特定しないで、これを発することができる。  
一 債務者に対し、係争物の占有の移転を禁止し、及び係争物の占有を解いて執行官に引き渡すべきことを命ずること。  
二 執行官に、係争物の保管をさせ、かつ、債務者が係争物の占有の移転を禁止されている旨及び執行官が係争物を保管している旨を公示させること。  
2 前項の規定による占有移転禁止の仮処分命令の執行がされたときは、当該執行によつて係争物である不動産の占有を解かれた者が、債務者となる。  
3 第一項の規定による占有移転禁止の仮処分命令は、第四十三條第二項の期間内にその執行がされなかったときは、債務者に対して送達することを要しない。この場合において、第四條第二項において準用する民事訴訟法第七十九條第一項の規定による担保の取消しの決定で第十四條第一項の規定により立てさせた担保に係るものは、裁判所が相当と認める方法で申立人に告知することによつて、その効力を生ずる。

(保全執行の停止の裁判等)  
第二十七條 保全執行の申立てがあつた場合において、保全命令の取消しの原因となることが明らかでない損害を生ずるおそれがあることにつき疎明があつたときに限り、裁判所は、申立てによ

り、保全異議の申立てについての決定において第三項の規定による裁判を立てることの間、担保を立てさせて、又は担保を立てることを条件として保全執行の停止又は既にした執行処分の取消しを命ずることができる。  
2 抗告裁判所が保全命令を發した場合において、事件の記録が原裁判所に存するときは、その裁判所も、前項の規定による裁判をすることができる。  
3 裁判所は、保全異議の申立てについての決定において、既にした第一項の規定による裁判を取り消し、変更し、又は認可しなければならない。  
4 第一項及び前項の規定による裁判に対しては、不服を申し立てることができない。  
5 第十五條の規定は、第一項の規定による裁判について準用する。

(事件の移送)  
第二十八條 裁判所は、当事者、尋問を受けるべき証人及び審尋を受けるべき参考人の住所その他の事情を考慮して、保全異議事件につき著しい遅滞を避け、又は当事者間の衡平を図るために必要があるときは、申立てにより又は職権で、当該保全命令事件につき管轄権を有する他の裁判所に事件を移送することができる。  
(保全異議の審理)  
第二十九條 裁判所は、口頭弁論又は当事者双方が立ち会うことができる審尋の期日を経なければ、保全異議の申立てについての決定をすることができない。  
第三十條 削除 (審理の終結)  
第三十一條 裁判所は、審理を終結するには、相當の猶予期間を置いて、審理を終結する日を決しなればならない。ただし、口頭弁論又は当事者双方が立ち会うことができる審尋の期日においては、直ちに審理を終結する旨を宣言することができる。

(保全異議の申立て)  
第二十六條 保全命令に對しては、債務者は、その命令を發した裁判所に保全異議を申し立てることができる。  
(保全執行の停止の裁判等)  
第二十七條 保全執行の申立てがあつた場合において、保全命令の取消しの原因となることが明らかでない損害を生ずるおそれがあることにつき疎明があつたときに限り、裁判所は、申立てによ

り、保全異議の申立てについての決定において第三項の規定による裁判を立てることの間、担保を立てさせて、又は担保を立てることを条件として保全執行の停止又は既にした執行処分の取消しを命ずることができる。  
2 抗告裁判所が保全命令を發した場合において、事件の記録が原裁判所に存するときは、その裁判所も、前項の規定による裁判をすることができる。  
3 裁判所は、保全異議の申立てについての決定において、既にした第一項の規定による裁判を取り消し、変更し、又は認可しなければならない。  
4 第一項及び前項の規定による裁判に対しては、不服を申し立てることができない。  
5 第十五條の規定は、第一項の規定による裁判について準用する。

り、保全異議の申立てについての決定において第三項の規定による裁判を立てることの間、担保を立てさせて、又は担保を立てることを条件として保全執行の停止又は既にした執行処分の取消しを命ずることができる。  
2 抗告裁判所が保全命令を發した場合において、事件の記録が原裁判所に存するときは、その裁判所も、前項の規定による裁判をすることができる。  
3 裁判所は、保全異議の申立てについての決定において、既にした第一項の規定による裁判を取り消し、変更し、又は認可しなければならない。  
4 第一項及び前項の規定による裁判に対しては、不服を申し立てることができない。  
5 第十五條の規定は、第一項の規定による裁判について準用する。

(事件の移送)  
第二十八條 裁判所は、当事者、尋問を受けるべき証人及び審尋を受けるべき参考人の住所その他の事情を考慮して、保全異議事件につき著しい遅滞を避け、又は当事者間の衡平を図るために必要があるときは、申立てにより又は職権で、当該保全命令事件につき管轄権を有する他の裁判所に事件を移送することができる。  
(保全異議の審理)  
第二十九條 裁判所は、口頭弁論又は当事者双方が立ち会うことができる審尋の期日を経なければ、保全異議の申立てについての決定をすることができない。  
第三十條 削除 (審理の終結)  
第三十一條 裁判所は、審理を終結するには、相當の猶予期間を置いて、審理を終結する日を決しなればならない。ただし、口頭弁論又は当事者双方が立ち会うことができる審尋の期日においては、直ちに審理を終結する旨を宣言することができる。

(保全異議の申立て)  
第二十六條 保全命令に對しては、債務者は、その命令を發した裁判所に保全異議を申し立てることができる。  
(保全執行の停止の裁判等)  
第二十七條 保全執行の申立てがあつた場合において、保全命令の取消しの原因となることが明らかでない損害を生ずるおそれがあることにつき疎明があつたときに限り、裁判所は、申立てによ

り、保全異議の申立てについての決定において第三項の規定による裁判を立てることの間、担保を立てさせて、又は担保を立てることを条件として保全執行の停止又は既にした執行処分の取消しを命ずることができる。  
2 抗告裁判所が保全命令を發した場合において、事件の記録が原裁判所に存するときは、その裁判所も、前項の規定による裁判をすることができる。  
3 裁判所は、保全異議の申立てについての決定において、既にした第一項の規定による裁判を取り消し、変更し、又は認可しなければならない。  
4 第一項及び前項の規定による裁判に対しては、不服を申し立てることができない。  
5 第十五條の規定は、第一項の規定による裁判について準用する。

(事件の移送)  
第二十八條 裁判所は、当事者、尋問を受けるべき証人及び審尋を受けるべき参考人の住所その他の事情を考慮して、保全異議事件につき著しい遅滞を避け、又は当事者間の衡平を図るために必要があるときは、申立てにより又は職権で、当該保全命令事件につき管轄権を有する他の裁判所に事件を移送することができる。  
(保全異議の審理)  
第二十九條 裁判所は、口頭弁論又は当事者双方が立ち会うことができる審尋の期日を経なければ、保全異議の申立てについての決定をすることができない。  
第三十條 削除 (審理の終結)  
第三十一條 裁判所は、審理を終結するには、相當の猶予期間を置いて、審理を終結する日を決しなればならない。ただし、口頭弁論又は当事者双方が立ち会うことができる審尋の期日においては、直ちに審理を終結する旨を宣言することができる。

(保全異議の申立て)  
第二十六條 保全命令に對しては、債務者は、その命令を發した裁判所に保全異議を申し立てることができる。  
(保全執行の停止の裁判等)  
第二十七條 保全執行の申立てがあつた場合において、保全命令の取消しの原因となることが明らかでない損害を生ずるおそれがあることにつき疎明があつたときに限り、裁判所は、申立てによ

の実施又は続行の条件とする旨を定めることができる。  
3 裁判所は、第一項の規定による保全命令を取り消す決定について、債務者が担保を立てることを条件とすることができる。  
4 第十六條本文及び第十七條の規定は、第一項の決定について準用する。  
(原状回復の裁判)  
第三十三條 仮処分命令に基づき、債権者が物の引渡し若しくは明渡し若しくは金銭の支払を受け、又は物の使用若しくは保管をしているときは、裁判所は、債務者の申立てにより、前条第一項の規定により仮処分命令を取り消す決定において、債権者に対し、債務者が引き渡し、若しくは明け渡した物の返還、債務者が支払った金銭の返還又は債権者が使用若しくは保管をしている物の返還を命ずることができる。  
(保全命令を取り消す決定の効力)  
第三十四條 裁判所は、第三十二條第一項の規定により保全命令を取り消す決定において、その送達を受けた日から二週間を超えない範囲内で相当と認める一定の期間を経過しなければその決定の効力が生じない旨を宣言することができる。ただし、その決定に対して保全抗告をすることができないときは、この限りでない。

(保全異議の申立ての取下げ)  
第三十五條 保全異議の申立てを取り下げるには、債権者の同意を得ることを要しない。  
(判事補の権限の特例)  
第三十六條 保全異議の申立てについての裁判は、判事補が単独ですることができない。  
第四節 保全取消し  
第三十七條 (本案の訴えの不起等による保全取消し)  
第三十七條 保全命令を發した裁判所は、債務者の申立てにより、債権者に対し、相当と認める一定の期間内に、本案の訴えを提起するとともにその提起を証する書面を提出し、既に本案の訴えを提起しているときはその係属を証する書面を提出すべきことを命じなければならない。  
2 前項の期間は、二週間以上でなければならない。  
3 債権者が第一項の規定により定められた期間内に同項の書面を提出しなかったときは、裁判所は、債務者の申立てにより、保全命令を取り消さなければならない。

(保全異議の申立て)  
第二十六條 保全命令に對しては、債務者は、その命令を發した裁判所に保全異議を申し立てることができる。  
(保全執行の停止の裁判等)  
第二十七條 保全執行の申立てがあつた場合において、保全命令の取消しの原因となることが明らかでない損害を生ずるおそれがあることにつき疎明があつたときに限り、裁判所は、申立てによ

り、保全異議の申立てについての決定において第三項の規定による裁判を立てることの間、担保を立てさせて、又は担保を立てることを条件として保全執行の停止又は既にした執行処分の取消しを命ずることができる。  
2 抗告裁判所が保全命令を發した場合において、事件の記録が原裁判所に存するときは、その裁判所も、前項の規定による裁判をすることができる。  
3 裁判所は、保全異議の申立てについての決定において、既にした第一項の規定による裁判を取り消し、変更し、又は認可しなければならない。  
4 第一項及び前項の規定による裁判に対しては、不服を申し立てることができない。  
5 第十五條の規定は、第一項の規定による裁判について準用する。

(事件の移送)  
第二十八條 裁判所は、当事者、尋問を受けるべき証人及び審尋を受けるべき参考人の住所その他の事情を考慮して、保全異議事件につき著しい遅滞を避け、又は当事者間の衡平を図るために必要があるときは、申立てにより又は職権で、当該保全命令事件につき管轄権を有する他の裁判所に事件を移送することができる。  
(保全異議の審理)  
第二十九條 裁判所は、口頭弁論又は当事者双方が立ち会うことができる審尋の期日を経なければ、保全異議の申立てについての決定をすることができない。  
第三十條 削除 (審理の終結)  
第三十一條 裁判所は、審理を終結するには、相當の猶予期間を置いて、審理を終結する日を決しなればならない。ただし、口頭弁論又は当事者双方が立ち会うことができる審尋の期日においては、直ちに審理を終結する旨を宣言することができる。

(保全異議の申立て)  
第二十六條 保全命令に對しては、債務者は、その命令を發した裁判所に保全異議を申し立てることができる。  
(保全執行の停止の裁判等)  
第二十七條 保全執行の申立てがあつた場合において、保全命令の取消しの原因となることが明らかでない損害を生ずるおそれがあることにつき疎明があつたときに限り、裁判所は、申立てによ

- 4 第一項の書面が提出された後に、同項の本案の訴えが取り下げられ、又は却下された場合には、その書面を提出しなかったものとみなす。
- 5 第一項及び第三項の規定の適用については、本案が家事事件手続法（平成二十三年法律第五十二号）第二百五十七条第一項に規定する事件であるときは家庭裁判所に対する調停の申立てを、本案が労働審判法（平成十六年法律第四十五号）第一条に規定する事件であるときは地方裁判所に対する労働審判手続の申立てを、本案に申し仲裁合意があるときは仲裁手続の開始の手続を、本案が公害紛争処理法（昭和四十五年法律第八十号）第二条に規定する公害に係る被害についての損害賠償の請求に関する事件であるときは同法第四十二条の十二第一項に規定する損害賠償の責任に関する裁定（次項において「責任裁定」という。）の申請を本案の訴えの提起とみなす。
- 6 前項の調停の事件、同項の労働審判手続、同項の仲裁手続又は同項の責任裁定の手続が調停の成立、労働審判（労働審判法第二十九条第二項において準用する民事調停法（昭和二十六年法律第二百二十二号）第十六条の規定による調停の成立及び労働審判法第二十四条第一項の規定による労働審判事件の終了を含む）、仲裁判断又は責任裁定（公害紛争処理法第四十二条の二十四第二項の当事者間の合意の成立を含む）によらないで終了したときは、債権者は、その終了の日から第一項の規定により定められた期間と同一の期間内に本案の訴えを提起しななければならない。
- 7 第三項の規定は債権者が前項の規定による本案の訴えの提起をしなかった場合について、第四項の規定は前項の本案の訴えが提起され、又は労働審判法第二十二條第一項（同法第二十三条第二項及び第二十四条第二項において準用する場合を含む。）の規定により訴えの提起があったものとみなされた後にその訴えが取り下げられ、又は却下された場合について準用する。
- 8 第十六条本文及び第十七条の規定は、第三項（前項において準用する場合を含む。）の規定による決定について準用する。

- 2 前項の事情の変更は、疎明しなければならぬ。
- 3 第十六条本文、第十七条並びに第三十二条第二項及び第三項の規定は、第一項の申立てについての決定について準用する。
- 3 前項の特別の事情は、疎明しなければならぬ。
- 3 第三十九条 仮処分命令により償うことができない損害を生ずるおそれがあるときその他の特別の事情があるときは、仮処分命令を発した裁判所又は本案の裁判所は、債務者の申立てにより、担保を立てることを条件として仮処分命令を取り消すことができる。
- 3 前項の特別の事情は、疎明しなければならぬ。
- 3 第三十九条 仮処分命令により償うことができない損害を生ずるおそれがあるときその他の特別の事情があるときは、仮処分命令を発した裁判所又は本案の裁判所は、債務者の申立てにより、担保を立てることを条件として仮処分命令を取り消すことができる。
- 3 前項の特別の事情は、疎明しなければならぬ。
- 3 第三十九条 仮処分命令により償うことができない損害を生ずるおそれがあるときその他の特別の事情があるときは、仮処分命令を発した裁判所又は本案の裁判所は、債務者の申立てにより、担保を立てることを条件として仮処分命令を取り消すことができる。
- 3 前項の特別の事情は、疎明しなければならぬ。
- 3 第三十九条 仮処分命令により償うことができない損害を生ずるおそれがあるときその他の特別の事情があるときは、仮処分命令を発した裁判所又は本案の裁判所は、債務者の申立てにより、担保を立てることを条件として仮処分命令を取り消すことができる。

- 2 前項において準用する第二十七条第一項の規定による裁判は、事件の記録が原裁判所に存するときは、その裁判所も、これを行うことができる。
- 5 前項において準用する第二十七条第一項の規定による裁判は、事件の記録が原裁判所に存するときは、その裁判所も、これを行うことができる。
- 5 前項において準用する第二十七条第一項の規定による裁判は、事件の記録が原裁判所に存するときは、その裁判所も、これを行うことができる。
- 5 前項において準用する第二十七条第一項の規定による裁判は、事件の記録が原裁判所に存するときは、その裁判所も、これを行うことができる。
- 5 前項において準用する第二十七条第一項の規定による裁判は、事件の記録が原裁判所に存するときは、その裁判所も、これを行うことができる。
- 5 前項において準用する第二十七条第一項の規定による裁判は、事件の記録が原裁判所に存するときは、その裁判所も、これを行うことができる。
- 5 前項において準用する第二十七条第一項の規定による裁判は、事件の記録が原裁判所に存するときは、その裁判所も、これを行うことができる。
- 5 前項において準用する第二十七条第一項の規定による裁判は、事件の記録が原裁判所に存するときは、その裁判所も、これを行うことができる。
- 5 前項において準用する第二十七条第一項の規定による裁判は、事件の記録が原裁判所に存するときは、その裁判所も、これを行うことができる。
- 5 前項において準用する第二十七条第一項の規定による裁判は、事件の記録が原裁判所に存するときは、その裁判所も、これを行うことができる。

- 2 債権者が前項の規定による書面の提出をしないうちにおいて、債務者が同項の裁判の正本を提出したときは、保全執行裁判所又は執行官は、既にした執行処分を取り消さなければならない。
- 3 民事執行法第四十条第二項の規定は、前項の規定により執行処分を取り消す場合について準用する。
- 3 民事執行法第四十条第二項の規定は、前項の規定により執行処分を取り消す場合について準用する。
- 3 民事執行法第四十条第二項の規定は、前項の規定により執行処分を取り消す場合について準用する。
- 3 民事執行法第四十条第二項の規定は、前項の規定により執行処分を取り消す場合について準用する。
- 3 民事執行法第四十条第二項の規定は、前項の規定により執行処分を取り消す場合について準用する。
- 3 民事執行法第四十条第二項の規定は、前項の規定により執行処分を取り消す場合について準用する。
- 3 民事執行法第四十条第二項の規定は、前項の規定により執行処分を取り消す場合について準用する。
- 3 民事執行法第四十条第二項の規定は、前項の規定により執行処分を取り消す場合について準用する。
- 3 民事執行法第四十条第二項の規定は、前項の規定により執行処分を取り消す場合について準用する。

（第三者異議の訴えの管轄裁判所の特例）  
 第四十五条 高等裁判所が保全執行裁判所としてした保全執行に対する第三者異議の訴えは、仮に差し押さえるべき物又は係争物の所在地を管轄する地方裁判所が管轄する。  
 （民事執行法の準用）  
 第四十六条 この章に特別の定めがある場合を除き、民事執行法第五条から第十四条まで、第十六条、第十八条、第二十三条第一項、第二十六条、第二十七条第二項、第二十八条、第三十条第二項、第三十二条から第三十四条まで、第三十六条から第三十八条まで、第三十九条第一項第一号から第四号まで、第六号及び第七号、第四十条並びに第四十一条の規定は、保全執行について準用する。  
 第二節 仮差押えの執行  
 （不動産に対する仮差押えの執行）  
 第四十七条 民事執行法第四十三条第一項に規定する不動産（同条第二項の規定により不動産とみなされるものを含む。）に対する仮差押えの執行は、仮差押えの登記をする方法又は強制管理の方法により行う。これらの方法は、併用することができる。

五十四條、第九十三條から第九十三條の三まで、第九十四條から第九十四條まで、第六百六條並びに第七百七條第一項の規定は強制管理の方法による仮差押えの執行について準用する。  
(船舶に対する仮差押えの執行)

**第四十八條** 船舶に対する仮差押えの執行は、仮差押えの登記をする方法又は執行官に対し船舶の国籍を証する文書その他の船舶の航行のために必要な文書(以下この条において「船舶国籍證書等」という。)を取り上げて保全執行裁判所に提出すべきことを命ずる方法により行う。これらの方法は、併用することができる。

**2** 仮差押えの登記をする方法による仮差押えの執行は仮差押命令を發した裁判所が、船舶国籍證書等の取上げを命ずる方法による仮差押えの執行は船舶の所在地を管轄する地方裁判所が、保全執行裁判所として管轄する。

**3** 前条第三項並びに民事執行法第四十六條第二項、第四十七條第一項、第四十八條第二項、第五十三條及び第五十四條の規定は仮差押えの登記をする方法による仮差押えの執行について、同法第四十五條第三項、第四十七條第一項、第五十三條、第六百六條及び第六百八條の規定は船舶国籍證書等の取上げを命ずる方法による仮差押えの執行について準用する。  
(動産に対する仮差押えの執行)

**第四十九條** 動産に対する仮差押えの執行は、執行官が目的物を占有する方法により行う。  
**2** 執行官は、仮差押えの執行に係る金銭を供託しなければならない。仮差押えの執行に係る手形、小切手その他の金銭の支払を目的とする有価証券でその権利の行使のため定められた期間内に引受け若しくは支払のため提示又は支払の請求を要するものについて執行官が支払を受けた金銭についても、同様とする。

**3** 仮差押えの執行に係る動産について著しい価値の減少を生ずるおそれがあるとき、又はその保管のために不相当な費用を要するときは、執行官は、民事執行法の規定による動産執行の売却の手続によりこれを売却し、その売得金を供託しなければならない。

**4** 民事執行法第二百二十三條から第二百二十九條まで、第三百一十一條、第三百二十二條及び第三百二十六條の規定は、動産に対する仮差押えの執行について準用する。  
(債権及びその他の財産権に対する仮差押えの執行)

**第五十條** 民事執行法第四十三條に規定する債権に対する仮差押えの執行は、保全執行裁判所

が第三債務者に対し債務者への弁済を禁止する命令を發する方法により行う。  
**2** 前項の仮差押えの執行については、仮差押命令を發した裁判所が、保全執行裁判所として管轄する。

**3** 第三債務者が仮差押えの執行がされた金銭の支払を目的とする債権の額に相当する金銭を供託した場合には、債務者が第二十二條第一項の規定により定められた金銭の額に相当する金銭を供託したものとみなす。ただし、その金銭の額を超える部分については、この限りでない。

**4** 第一項及び第二項の規定は、その他の財産権に対する仮差押えの執行について準用する。  
**5** 民事執行法第四十五條第二項から第六項まで、第六百四十六條から第六百五十三條まで、第六百五十六條(第三項を除く)、第六百六十四條第五項及び第六項並びに第六百六十七條の規定は、第一項の債権及びその他の財産権に対する仮差押えの執行について準用する。  
(仮差押解放金の供託による仮差押えの執行の取消し)

**第五十一條** 債務者が第二十二條第一項の規定により定められた金銭の額に相当する金銭を供託したことを証明したときは、保全執行裁判所は、仮差押えの執行を取り消さなければならない。  
**2** 前項の規定による決定は、第四十六條において準用する民事執行法第十二條第二項の規定にかかわらず、即時にその効力を生ずる。

**第三節 仮処分執行**  
**第五十二條** 仮処分の執行については、この節に定めるもののほか、仮差押えの執行又は強制執行の例による。

**2** 物の給付その他の作為又は不作為を命ずる仮処分の執行については、仮処分命令を債務名義とみなす。  
(不動産の登記請求権を保全するための処分禁止の仮処分の執行)

**第五十三條** 不動産に関する権利についての登記(仮登記を除く。)を請求する権利(以下「登記請求権」という。)を保全するための処分禁止の仮処分の執行は、処分禁止の登記をする方法により行う。  
**2** 不動産に関する所有権以外の権利の保存、設定又は変更についての登記請求権を保全するための処分禁止の仮処分の執行は、前項の処分禁

止の登記とともに、仮処分による仮登記(以下「保全仮登記」という。)をする方法により行う。  
**3** 第四十七條第二項及び第三項並びに民事執行法第四十八條第二項、第五十三條及び第五十四條の規定は、前二項の処分禁止の仮処分の執行について準用する。  
(不動産に関する権利以外の権利についての登記又は登記請求権を保全するための処分禁止の仮処分の執行)

**第五十四條** 前条の規定は、不動産に関する権利以外の権利で、その処分の制限につき登記又は登録を対抗要件又は効力発生要件とするものについての登記(仮登記を除く。)又は登録(仮登記を除く。)を請求する権利を保全するための処分禁止の仮処分の執行について準用する。  
(債務者を特定しないて發された占有移転禁止の仮処分命令の執行)

**第五十四條の二** 第二十五條の二第一項の規定による占有移転禁止の仮処分命令の執行は、係争物である不動産の占有を解く際にその占有者を特定することができない場合は、することができない。  
(建物取去土地明渡請求権を保全するための建物の処分禁止の仮処分の執行)

**第五十五條** 建物の取去及びその敷地の明渡しの請求権を保全するため、その建物の処分禁止の仮処分命令が發せられたときは、その仮処分の執行は、処分禁止の登記をする方法により行う。  
**2** 第四十七條第二項及び第三項並びに民事執行法第四十八條第二項、第五十三條及び第五十四條の規定は、前項の処分禁止の仮処分の執行について準用する。  
(法人の代表者の職務執行停止の仮処分等の登記の嘱託)

**第五十六條** 法人を代表する者その他法人の役員として登記された者について、その職務の執行を停止し、若しくはその職務を代行する者を選任する仮処分命令又はその仮処分命令を変更し、若しくは取り消す決定がされた場合には、裁判所書記官は、法人の本店又は主たる事務所の所在地(外国法人にあつては、各事務所の所在地)を管轄する登記所にその登記を嘱託しなければならない。ただし、これらの事項が登記すべきものでないときは、この限りでない。  
(仮処分解放金の供託による仮処分の執行の取消し)

**第五十七條** 債務者が第二十五條第一項の規定により定められた金銭の額に相当する金銭を供託

したことを証明したときは、保全執行裁判所は、仮処分の執行を取り消さなければならない。  
**2** 第五十一條第二項の規定は、前項の規定による決定について準用する。  
**第四章 仮処分の効力**  
(不動産の登記請求権を保全するための処分禁止の仮処分の効力)

**第五十八條** 第五十三條第一項の処分禁止の登記の後にされた登記に係る権利の取得又は処分の制限は、同項の仮処分の債権者が保全すべき登記請求権に係る登記をする場合には、その登記に係る権利の取得又は消滅と抵触する限度において、その債権者に対抗することができない。  
**2** 前項の場合においては、第五十三條第一項の仮処分の債権者(同条第二項の仮処分の債権者を除く。)は、同条第一項の処分禁止の登記に後れる登記を抹消することができる。  
**3** 第五十三條第二項の仮処分の債権者が保全すべき登記請求権に係る登記をするには、保全仮登記に基づく本登記をする方法による。

**4** 第五十三條第二項の仮処分の債権者は、前項の規定により登記をする場合において、その仮処分により保全すべき登記請求権に係る権利が不動産の使用又は収益をするものであるときは、不動産の使用若しくは収益をする権利(所有権を除く。)又はその権利を目的とする権利の取得に関する登記で、同条第一項の処分禁止の登記に後れるものを抹消することができる。  
(登記の抹消の通知)

**第五十九條** 仮処分の債権者が前条第二項又は第四項の規定により登記を抹消するには、あらかじめ、その登記の権利者に対し、その旨を通知しなければならない。  
**2** 前項の規定による通知は、これを發する時の同項の権利者の登記簿上の住所又は事務所にあつて發することができる。この場合には、その通知は、遅くとも、これを發した日から一週間を経過した時に到達したものとみなす。  
(仮処分命令の更正等)

**第六十條** 保全仮登記に係る権利の表示がその保全仮登記に基づく本登記をすべき旨の本案の債務名義における権利の表示と符合しないときは、第五十三條第二項の処分禁止の仮処分の命令を發した裁判所は、債権者の申立てにより、その命令を更正しなければならない。

2 前項の規定による更正決定に対しては、即時抗告をすることができる。

3 第一項の規定による更正決定が確定したときは、裁判所書記官は、保全仮登記の更正を囑託しなければならない。

(不動産に関する権利以外の権利についての登記又は登録請求権を保全するための処分禁止の仮処分の効力)

第六十一条 前三条の規定は、第五十四条に規定する処分禁止の仮処分の効力について準用する。

(占有移転禁止の仮処分命令の効力)

第六十二条 占有移転禁止の仮処分命令の執行がされたときは、債権者は、本案の債務名義に基づき、次に掲げる者に対し、係争物の引渡し又は明渡しを強制執行をすることができる。

一 当該占有移転禁止の仮処分命令の執行がされたことを知って当該係争物を占有した者

二 当該占有移転禁止の仮処分命令の執行後にその執行がされたことを知らないで当該係争物について債務者の占有を承継した者

2 占有移転禁止の仮処分命令の執行後に当該係争物を占有した者は、その執行がされたことを知って占有したものと推定する。

(執行文の付与に対する異議の申立ての理由)

第六十三条 前条第一項の本案の債務名義につき同項の債務者以外の者に対する執行文が付与されたときは、その者は、執行文の付与に対する異議の申立てにおいて、債権者に対抗することができ、債権者により当該物を占有していること、又はその仮処分の執行がされたことを知らず、かつ、債務者の占有の承継人でないことを理由とすることができる。

(建物取去土地明渡請求権を保全するための建物の処分禁止の仮処分の効力)

第六十四条 第五十五条第一項の処分禁止の登記がされたときは、債権者は、本案の債務名義に基づき、その登記がされた後に建物を譲り受けた者に対し、建物の取去及びその敷地の明渡しの強制執行をすることができる。

(詐害行為取消権を保全するための仮処分における解放金に対する権利の行使)

第六十五条 民法(明治二十九年法律第八十九号)第四百二十四条第一項の規定による詐害行為取消権を保全するための仮処分命令において定められた第二十五条第一項の金額の額に相当する金額が供託されたときは、同法第四百二十

四条第一項の債務者は、供託金の還付を請求する権利(以下「還付請求権」という。)を取得する。この場合において、その還付請求権は、その仮処分の執行が第五十七条第一項の規定により取り消され、かつ、保全すべき権利についての本案の判決が確定した後に、その仮処分の債権者が同法第四百二十四条第一項の債務者に対する債務名義によりその還付請求権に対し強制執行をするときに限り、これを行使することができる。

第五章 罰則

(公示書等損壊罪)

第六十六条 第五十二条第一項の規定によりその例によることとされる民事執行法第六十八条の二第三項又は第四項の規定により執行官が公示するために施した公示書その他の標識を損壊した者は、一年以下の懲役又は百万円以下の罰金に処する。

(陳述等拒絶の罪)

第六十七条 第五十二条第一項の規定によりその例によることとされる民事執行法第六十八条第二項の規定による執行官の質問又は文書の提出の要求に対し、正当な理由なく、陳述をせず、若しくは文書の提示を拒み、又は虚偽の陳述をし、若しくは虚偽の記載をした文書を提示した債務者又は同項に規定する不動産等を占有する第三者は、六月以下の懲役又は五十万円以下の罰金に処する。

(施行期日)

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一四年六月二二日法律第六五号) 抄

第一条 (平成一四年六月二二日法律第六五号) 抄

第一条 この法律は、平成十五年一月六日から施行する。

第八十五条 この附則に規定するもののほか、この法律の施行に関し必要な経過措置は、政令で定める。

附則 (平成一五年七月一六日法律第一〇八号) 抄

(施行期日)

第一条 この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年六月二六日法律第一〇号) 抄

第一条 (平成一六年六月二六日法律第一〇号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年五月二二日法律第四五号) 抄

第一条 (平成一六年五月二二日法律第四五号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年六月九日法律第八八号) 抄

第一条 (平成一六年六月九日法律第八八号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して五年を超えない範囲内において政令で定める日(以下「施行日」という。)から施行する。

附則 (罰則の適用に関する経過措置)

第三十三条 この法律(附則第一条ただし書に規定する規定については、当該規定。以下この条において同じ。)の施行前にした行為並びに

(施行期日)

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一五年八月一日法律第一三〇号) 抄

第一条 (平成一五年八月一日法律第一三〇号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一五年八月一日法律第一三〇号) 抄

第一条 (平成一五年八月一日法律第一三〇号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して九月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(罰則の適用に関する経過措置)

第十四条 施行日前にした行為に対する罰則の適用については、なお従前の例による。

附則 (平成一五年八月一日法律第一三〇号) 抄

第一条 (平成一五年八月一日法律第一三〇号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して九月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(罰則の適用に関する経過措置)

第十四条 この法律の施行前にした行為及び附則第十五条の規定によりなお従前の例によることとされる場合におけるこの法律の施行後にした行為に対する罰則の適用については、なお従前の例による。

附則 (平成一六年五月二二日法律第四五号) 抄

第一条 (平成一六年五月二二日法律第四五号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年六月九日法律第八八号) 抄

第一条 (平成一六年六月九日法律第八八号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して五年を超えない範囲内において政令で定める日(以下「施行日」という。)から施行する。

附則 (罰則の適用に関する経過措置)

第三十三条 この法律(附則第一条ただし書に規定する規定については、当該規定。以下この条において同じ。)の施行前にした行為並びに

(施行期日)

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年六月二六日法律第一〇号) 抄

第一条 (平成一六年六月二六日法律第一〇号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年五月二二日法律第四五号) 抄

第一条 (平成一六年五月二二日法律第四五号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年六月九日法律第八八号) 抄

第一条 (平成一六年六月九日法律第八八号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して五年を超えない範囲内において政令で定める日(以下「施行日」という。)から施行する。

附則 (罰則の適用に関する経過措置)

第三十三条 この法律(附則第一条ただし書に規定する規定については、当該規定。以下この条において同じ。)の施行前にした行為並びに

(施行期日)

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年六月二六日法律第一〇号) 抄

第一条 (平成一六年六月二六日法律第一〇号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年五月二二日法律第四五号) 抄

第一条 (平成一六年五月二二日法律第四五号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年六月九日法律第八八号) 抄

第一条 (平成一六年六月九日法律第八八号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して五年を超えない範囲内において政令で定める日(以下「施行日」という。)から施行する。

附則 (罰則の適用に関する経過措置)

第三十三条 この法律(附則第一条ただし書に規定する規定については、当該規定。以下この条において同じ。)の施行前にした行為並びに

(施行期日)

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年六月二六日法律第一〇号) 抄

第一条 (平成一六年六月二六日法律第一〇号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年五月二二日法律第四五号) 抄

第一条 (平成一六年五月二二日法律第四五号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年六月九日法律第八八号) 抄

第一条 (平成一六年六月九日法律第八八号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して五年を超えない範囲内において政令で定める日(以下「施行日」という。)から施行する。

附則 (罰則の適用に関する経過措置)

第三十三条 この法律(附則第一条ただし書に規定する規定については、当該規定。以下この条において同じ。)の施行前にした行為並びに

この附則の規定によりなお従前の例によることとされる場合及びなおその効力を有することとされる場合におけるこの法律の施行後にした行為に対する罰則の適用については、なお従前の例による。

(その他の経過措置の政令への委任)

第三十六条 この附則に規定するもののほか、この法律の施行に関し必要な経過措置は、政令で定める。

附則 (平成一六年六月一八日法律第一二四号) 抄

第一条 (平成一六年六月一八日法律第一二四号) 抄

第一条 この法律は、新不動産登記法の施行の日から施行する。

附則 (平成一六年一二月三日法律第一五二号) 抄

第一条 (平成一六年一二月三日法律第一五二号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(罰則の適用に関する経過措置)

第三十九条 この法律の施行前にした行為及びこの附則の規定によりなお従前の例によることとされる場合におけるこの法律の施行後にした行為に対する罰則の適用については、なお従前の例による。

(政令への委任)

第四十条 附則第三条から第十条まで、第二十九条及び前二条に規定するもののほか、この法律の施行に関し必要な経過措置は、政令で定める。

附則 (平成一六年一二月一〇日法律第一六五号) 抄

第一条 (平成一六年一二月一〇日法律第一六五号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して六月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。ただし、附則第四条及び第五条の規定は、公布の日から施行する。

附則 (平成一七年七月二六日法律第八七号) 抄

第一条 (平成一七年七月二六日法律第八七号) 抄

第一条 この法律は、会社法の施行の日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一 第二百四十二条の規定 この法律の公布の日

附則 (平成一七年一〇月二二日法律第一〇二号) 抄

(施行期日)

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年六月二六日法律第一〇号) 抄

第一条 (平成一六年六月二六日法律第一〇号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年五月二二日法律第四五号) 抄

第一条 (平成一六年五月二二日法律第四五号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年六月九日法律第八八号) 抄

第一条 (平成一六年六月九日法律第八八号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して五年を超えない範囲内において政令で定める日(以下「施行日」という。)から施行する。

附則 (罰則の適用に関する経過措置)

第三十三条 この法律(附則第一条ただし書に規定する規定については、当該規定。以下この条において同じ。)の施行前にした行為並びに

(施行期日)

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年六月二六日法律第一〇号) 抄

第一条 (平成一六年六月二六日法律第一〇号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年五月二二日法律第四五号) 抄

第一条 (平成一六年五月二二日法律第四五号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年六月九日法律第八八号) 抄

第一条 (平成一六年六月九日法律第八八号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して五年を超えない範囲内において政令で定める日(以下「施行日」という。)から施行する。

附則 (罰則の適用に関する経過措置)

第三十三条 この法律(附則第一条ただし書に規定する規定については、当該規定。以下この条において同じ。)の施行前にした行為並びに

(施行期日)

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年六月二六日法律第一〇号) 抄

第一条 (平成一六年六月二六日法律第一〇号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年五月二二日法律第四五号) 抄

第一条 (平成一六年五月二二日法律第四五号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年六月九日法律第八八号) 抄

第一条 (平成一六年六月九日法律第八八号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して五年を超えない範囲内において政令で定める日(以下「施行日」という。)から施行する。

附則 (罰則の適用に関する経過措置)

第三十三条 この法律(附則第一条ただし書に規定する規定については、当該規定。以下この条において同じ。)の施行前にした行為並びに

(施行期日)

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年六月二六日法律第一〇号) 抄

第一条 (平成一六年六月二六日法律第一〇号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年五月二二日法律第四五号) 抄

第一条 (平成一六年五月二二日法律第四五号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年六月九日法律第八八号) 抄

第一条 (平成一六年六月九日法律第八八号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して五年を超えない範囲内において政令で定める日(以下「施行日」という。)から施行する。

附則 (罰則の適用に関する経過措置)

第三十三条 この法律(附則第一条ただし書に規定する規定については、当該規定。以下この条において同じ。)の施行前にした行為並びに





正規定、第九十四条中船舶の所有者等の責任の制限に関する法律第五十九条の次に一条を加える改正規定、第一百零条中民法第四十六条の改正規定（「第十八条」の下に、「第十八条の二」を加える部分に限る。）、第三十条中金融機関等の更生手続の特例等に関する法律第六十六条の改正規定及び同法第二百三十二条の改正規定、第四百四十五条中民法第一百五十

産的被害等の集団的な回復のための民事の裁判手続の特例に関する法律第五十三条の改正規定（「第八十七条の二」を削る部分に限る。）、民事訴訟法等の一部を改正する法律の施行の日

の次に一条を加える改正規定及び同法第五百三十三条第三項の改正規定（「民事執行法（昭和五十四年法律第四号）第八十五条」を「民事執行法（昭和五十四年法律第四号）第八十五条」を「民事執行法第八十五条から第八十六条まで」に改める部分に限る。）、第二百六十一条第一項の規定、第二百二条中会社更生法第一百零三条第三項の改正規定（「民事執行法（昭和五十四年法律第四号）第八十五条」を「民事執行法第八十五条から第八十六条まで」に改める部分に限る。）、及び同法第一百十五條の次に一条を加える改正規定、第一百十六條第一項の規定、第二百十九條中人事訴訟法第九條に一項を加える改正規定及び同法第三十三條に二項を加える改正規定、第二百四十九條中破産法第二百一十一條の次に一条を加える改正規定、同法第二百二十二條第二項の改正規定、同法第三百十六條の次に一条を加える改正規定及び同法第九十一條第三項の改正規定（「第八十五条」の下に「から第八十六条まで」を加える部分に限る。）、第二百六十五條第一項の規定、第三百四條中非訟事件手続法第三十三條第四項の改正規定、同法第四十三條の改正規定及び同法第四十七條第一項の改正規定、第三百二十六條中家事事件手続法第四十條の改正規定、同法第四十九條の改正規定、同法第五十四條第一項の改正規定、同法第五十九條の改正規定、同法第六十條第二項の改正規定（「及び第一項」を「から第三項まで」に改める部分に限る。）、同法第八十四條第一項の改正規定（「第三項まで」を「第四項まで」に改める部分及び「高等裁判所に」との下に、「第五十九條第三項中「家庭裁判所及び」とあるのは「高等裁判所及び」とを加える部分に限る。）、同法第二百六十條第一項第六号の改正規定及び同法第二百六十一條第五項の改正規定、第三百四十一條中国際的な子の奪取の民事上の側面に関する条約の実施に関する法律第七十條の改正規定、同法第七十五條第一項の改正規定、同法第八十條に一項を加える改正規定及び同法第一百三條第六項の改正規定並びに第三百五十六條中消費者の財